

6 IB 認定校における TOK の具体的な単元の指導事例

※掲載している指導事例は、TOK の趣旨を踏まえ、各学校の創意工夫によって実施しているものであり、これら事例をそのまま実施するのではなく、これらの事例も参考に、地域や学校、生徒の実態に応じた創意工夫により特色ある授業を行うことが求められます。

玉川学園高等部

玉川学園高等部では、TOK の学習目標として以下の3つを掲げている。

- ①知識の基となるものと学習者との関わりを調べる。
- ②「 Knowledge Claim 」と学習者の視点から見た「 Knowledge Issue 」についてディスカッションする力を養う。
- ③知識の本質について、自分なりの結論を導き出すための思考プロセスを養う。

このため、IBO が定めた評価規準を踏まえ、学習者の視点、Knowledge Issue の理解、Knowledge Issue の分析といった3つの観点で独自の評価規準を設けている。各単元においては、生徒の日常的な学習活動に対する形成的評価(授業への参加、発言内容、自ら考える姿勢、他の生徒の意見への傾聴など)を行うとともに、単元の内容に応じた観点から評価課題を設定し、総括的評価を行っている。

TOK指導案 「 TOK 」概論に関する事例

<p>1 単元名 学習者と知ること</p>
<p>2 学年 高校2年</p>
<p>3 各概念の統合</p> <div style="text-align: center;"> </div>
<p>4 単元の目標</p> <p>○知識の本質や物事を知るためのプロセスを振り返る機会を生徒に与え、同時に知識の幅や広がり、限界、生徒一人ひとり又は社会に対して知識が担う役割や責任について深く考えることができるようにする。</p> <p>○ Knowledge Issue の本質や、TOK におけるクリティカル・シンキングをサポートするための Knowledge Issue の重要な役割について調べることができるようにする。</p>
<p>5 使用する教材等</p> <p>① Ken Sievers, Martin Davies 「 Nature of Knowing 」, Michael Woolman 「 Ways of Knowing 」 (IBID Press)</p> <p>② Eileen Dombrowski, Lena Rotenberg, Mimi Bick(2007) 「 Theory of Knowledge Course Companion 」 (Oxford University Press)</p> <p>③ Sue Bastian(2008) 「 Theory of Knowledge 」 (Pearson Baccalaureate)</p> <p>④ Richard van de Lagemaat(2005) 「 Theory of Knowledge for the IB Diploma 」(Cambridge University Press)</p> <p>⑤ Knowledge Issues in the News (資料3-1参照)</p>

6 単元の指導過程

	学 習 活 動	指導上の留意点・評価
第1時限目	<p>(1) 「知識とは何か」という問いかけから授業を展開する。</p> <p>(2) 知識とは何かについて各自で考え、それぞれに導き出したアイデアを図（もしくは一連の絵）に描き、クラスで発表する。</p> <p>(3) テーブルの上に物体（りんごなど）を置き、「その物体について知っていること」と「どのようにしてそれを知ったのか」をクラス全体でボードに書く。</p>	<p><指導上の留意点></p> <p>知識の性質や知識の起源など知識とは何かということについて書かれた文章（教材③11～18ページ「What is knowledge?」参照）を踏まえて生徒の理解を求める。</p> <p><評価></p> <p>形成的評価</p> <p>【規準 A】学習者の視点を参照</p>
第2時限目	<p>(1) 生徒同士がペアになり、様々な「知るための方法」をリストに書き、重要度が高いと思われる順にランク付けをする。</p> <p>(2) つけた順序について、なぜそのような考えたのかをペアごとに説明し、クラス全体で各ペアの結果を比較し、それぞれの考え方に、何らかの合意が見られるかを話し合う。</p> <p>(3) 同じペアで話し合い、次の質問に対する自分たちの考えや意見をまとめていく。</p> <p>「物事を知るためのある方法が、別の方法よりも価値が高いということはあるのだろうか。その判断は誰が、どのような考えに基づいて行うのだろうか。」</p>	<p><評価></p> <p>形成的評価</p> <p>【規準 A】学習者の視点を参照</p>
第3時限目	<p>(1) 前の授業で行ったランク付けの活動の結果について、どのようにランク付けを決定したのかなどについて話し合う。</p> <p>(2) 私たちが持つ「常識」が、物事を理解する上で時として制限ともなることを、説明する。</p> <p>例) 自分が見慣れた地図を当たり前と思いがちだが、地図に示されていることが本当に正しいかどうかは実際に確かめてみないと分からない。様々な地図を示すことで「常識」がもたらす制限について説明を行う。</p> <p>(3) あることが真実だということをどのようにして知るのかを考えるために、真実の不確実性を認識させる活動を行う。</p> <p>例) 水が消えるアクティビティー</p> <p>ある生徒の頭の上に水を入れたコップを置き、その生徒には、「あるおまじないをす</p>	<p><指導上の留意点></p> <p>常識や真実だと思っていることを考え直させる活動を取り入れ、真実の不確実性について生徒の理解を求める。</p> <p><評価></p> <p>形成的評価</p> <p>【規準 A】学習者の視点を参照</p>

	<p>ると水が消える」と説明する。(実際には教員がコップの中の水をストローで吸って空にする。) その生徒にとっては「あるおまじないによって水が消える」ということは真実であるが、その真実も不確実なものであることを説明する。</p>	
<p>第4時限目</p>	<p>(1) Knowledge Issue について説明し、その後、私たちはどのように知識を得ているのかについて、ディスカッションをする。</p> <p>(2) 「Knowledge Issue とは何か。」「Knowledge Issue でないものは何か。」を、以下の例を用いて明確にする。</p> <p>例) 世界的に有名なバイオリニストであるジョシュア・ベルが名器ストラディバリウスを顔を隠した状態で道端で演奏していたとする。誰もが心をひかれて立ち止まるだろうか。(結果は、気付いた者は1名だけ。しかも、その人はジョシュア・ベルだと知って立ち止まった。)</p> <p>(3) IBO 作成の「Understanding Knowledge Issues」(資料1-4参照)を参考に、自らの生活の中から考え出された、良い Knowledge Issue について自分なりの考えをまとめ、クラスメートの前に出て個別にプレゼンテーションを行う。</p> <p>例) 「おじが針治療に行った」(自分の生活の中にある出来事) から Knowledge Issue を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・伝統的な医術。(Knowledge Issue になっていない。テーマに過ぎない。) ・針治療は効くのか。(あまりよくない例。「はい」や「いいえ」で片付く質問で、広がりが無い。) ・針治療が効くかどうかはどのようにして判断できるのか。(普通レベルの例) ・科学的説明において説得力があるかどうかは何によって決まるのか。(知識へとつながるよい例。) <p>(4) クラスで最もよい Knowledge Issue を決定する。</p>	<p><指導上の留意点></p> <p>Knowledge Issue を生徒に考えさせることにより、良い Knowledge Issue とはどのようなものかについて生徒の理解を求める。</p> <p><評価></p> <p>形成的評価</p> <p>【規準 A】学習者の視点を参照</p>
<p>第5時限目</p>	<p>(1) ある Knowledge Claim が正しいと言える根拠はどのように示されるのかについて、以下の例を用いて話し合いを行う。</p> <p>例) 「光より速いニュートリノ」といった新聞記事など、果たして本当なのかと思うような内容の記事を使って、Knowledge Issue について</p>	<p><指導上の留意点></p> <p>Knowledge Issue を生徒に考えさせることにより、良い Knowledge Issue とはどのようなものかについて生徒の理解を求める。</p>

	<p>考えさせる。</p> <p>(2) 上の記事を読んだ後、グループに分かれてマインドマップを作成することにより、ブレインストーミングを行い、良い Knowledge Issue を練りあげる。</p> <p>(3) 作成したマインドマップを壁に貼り、それぞれの生徒が書いた内容について深く考え、お互いのマインドマップに込められた Knowledge Issue は何かを推測し合う。最後にクラス全体でディスカッションを行う。</p> <p>(4) 評価課題※1を配布し、生徒はそれぞれ課題に取り組む。</p>	<p><評価> 形成的評価 【規準 B】 Knowledge Issues の理解を参照 ※1「Knowledge Issues in the News」(資料3-1参照) Knowledge Claim は学習者に何らかの責任を生じさせるかという Knowledge Issue について、興味ある新聞記事を選び、自分の考えをまとめたポスターを作成する。 授業において発表は行わず、生徒が作成したポスターを教員が評価した後、教室に掲示し、生徒間でピアレビューを行う。</p>
<p>第6時限目</p>	<p>(1) 「認識 (Knowing)」 と 「信念 (Belief)」 の2つの言葉の違い (証明の方法も含め) や、知覚の基本的な限界について、クラスでディスカッションを行う。</p> <p>(2) 集団の中で真実であると信じられていること (Collective belief) の役割を考えるため、以下のような点について、例を用いて、TOK の6つの知識の領域に関連付けながらディスカッションを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ どういう集団がどういう考えを持っているのか。それは、どうやってできあがっていくのか。 ・ 「認識」 がどういう過程を経て「信念」 に変わるのか。 例) 捕鯨に関する日本とオーストラリアの考え方の違い 	<p><指導上の留意点> 授業の残り時間を、生徒が個別に評価課題に取り組むための時間にあてるようにする。</p> <p><評価> 形成的評価 【規準 A】 学習者の視点を参照</p>
<p>第7時限目</p>	<p>(1) 生徒の主導の下で、次のトピックについて、ディスカッションを行う。 「ある Knowledge Claim が、他の Knowledge Claim よりも重要だということはあるのだろうか (例: 科学 vs 占星術)。そうであれば、Knowledge Claim は学習者に対してどのような責任を負うのだろうか。知識のレベルは、人々の行動に対し、何らかの影響を与えるだろうか。」</p>	<p><指導上の留意点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ディスカッションにおいては、教員はルールを示す (例: 人を否定するのではなく、アイデアの議論をする) のみで、指導は行わない。 ・ 知識を得ることにはどういう責任が伴うのか (例: 伝える責任) について生徒の理解を求める。 <p><評価> 形成的評価 【規準 A】 学習者の視点を参照</p>

7 評価規準(付けたい力)

(1)総括的評価

各授業における教員による形成的評価(規準 A)と、評価課題への取組に対する評価(規準 B)により、単元の中で TOK の学習目標がどこまで達成できたかを総括的に評価する。

<規準 A> 学習者の視点

段階	観 点	指 標	評価(6点)
A1	Knowledge Issue に対する自分なりの気付きや認識、考えを導き出す力を示す。	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2
A2	一人一人が異なる視点を持つ学習者として、自分なりの気付きや視点、考え方を表す。	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2
A3	Knowledge Issue に学習者としての自らの経験や日常生活を重ね合わせる。	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2

<規準 B> Knowledge Issue の理解

段階	観 点	指 標	評価(6点)
B1	Knowledge Issue に関する質問や説明、別の視点からの考え方、可能性のある答えなどを自らの力で考え、導き出す。	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2
B2	Knowledge Issue への様々なアプローチ法を、互いにリンクさせつつ、それぞれの方法を効果的に比較する。	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2
B3	適切な根拠や議論、例などをふさわしい形で用いる。	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2

TOK指導案 「知るための方法」に関する事例

<p>1 単元名 「知るための方法」としての感情</p>
<p>2 学年 高校2年</p>
<p>3 各概念の統合</p> <div style="text-align: center;"> </div>
<p>4 単元の目標</p>
<p>○考えを形作るものとして、又は人々の行動に影響を与えるものとして、更には知識を追い求める際の舵取り役として、感情がどれほど力強い役割を担っているかということを深く考えていくことができるようにする。</p> <p>○私たちを取り巻くこの世界を理解する上で、また自分自身を理解する上で、感情は重要な要素であると言える。この2つの理解に感情がどのように関わり、役立つのかを、知るための方法としての感情の本質や価値、限界についてのディスカッションを通して詳しく掘り下げて考えることができるようにする。</p>
<p>5 使用する教材等</p>
<p>① Ken Sievers, Martin Davies 「Nature of Knowing」, Michael Woolman 「Ways of Knowing」 (IBID Press)</p> <p>② Eileen Dombrowski, Lena Rotenberg, Mimi Bick (2007) 「Theory of Knowledge Course Companion」 (Oxford University Press)</p> <p>③ Sue Bastian (2008) 「Theory of Knowledge」 (Pearson Baccalaureate)</p> <p>④ Richard van de Lagemaat (2005) 「Theory of Knowledge for the IB Diploma」 (Cambridge University Press)</p> <p>⑤ Obstacle or source? (資料3-2参照)</p> <p>⑥ TED Talks 「Anthony Robbins asks us why we do what we do」 (映像資料)</p>

6 単元の指導過程

	学 習 活 動	指導上の留意点・評価
第1時限目	<p>(1) Knowledge Issue を書くところから、授業を展開する。:</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">感情や価値観から完全に独立した「知識」は存在するのだろうか。</div> <p>(2) 生徒の主導の下、上記の Knowledge Issue についてディスカッションを行う。</p> <p>(3) その後、生徒は、感情とは何かをイメージしてノートに絵を描く。</p>	<p><指導上の留意点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・絵やイメージを用いて、感情の本質を生徒に理解させる。 ・教員は、教材③64～67ページ「Reason and Emotion」の内容を踏まえて感情の性質等について生徒に説明する。 <p><評価></p> <p>形成的評価</p> <p>【規準 A】学習者の視点を参照</p>
第2時限目	<p>(1) 授業の最初に質問を投げかける:</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">感情と知覚の間には何らかの関わりがあるのだろうか。 感情と体験の間には何らかの関わりがあるのだろうか。</div> <p>(2) 感情と知覚（グループ活動）</p> <p>感情と知覚の関わりについて、グループでディスカッションを行う。</p> <p>例) ドガの絵画についてのグループディスカッション: ドガの絵の中の女の子がどう感じているかなど、その表情や体の動きから何が読み取れるかを考える。</p> <p>(3) 感情とボディーランゲージ（グループ活動）</p> <p>1人の生徒が教室から出て、ある感情をボディーランゲージで表しながら再び教室へ入る。他の生徒はその生徒がどんな感情を表現しているのかを推測する。どれだけ多くの感情を表すことができるか、各自の考えをクラス全体で議論する。</p>	<p><指導上の留意点></p> <p>生徒に、感情と知覚や体験との関係を考えさせる。</p> <p><評価></p> <p>形成的評価</p> <p>【規準 A】学習者の視点を参照</p>
第3時限目	<p>(1) 主な感情「喜」「怒」「哀」「楽」「愛」「憎」について説明し、①これらの感情は世界共通のものであるか、②感情を表すとき、文化ごとに異なる規則があるのか、③どのような知識が感情と関係するのかなどの視点から、感情は全ての文化に共通するものであるという見解についてディスカッションを行う。その後、顔写真を生徒に見せて、それぞれの感情を見極める。</p>	<p><指導上の留意点></p> <p>何かを知覚する際に感情が果たす役割について生徒に考えさせる。</p> <p><評価></p> <p>形成的評価</p> <p>【規準 A】学習者の視点を参照</p>

	<p>(2) 表現と識別 (グループ活動)</p> <p>「心の知能指数(EQ)」※1のコンセプトの紹介。「論理的・数学的知性」や「空間的知性」と同じように「心の知能」が非常に重要なものであるという考えがあるが、それはなぜかということについて、クラスでディスカッションを行う。</p> <p>(3) 心の知能指数テスト (オンラインによる EQ テスト) を行い、その結果をクラスメートと共有する。</p>	<p>※1 「心の知能」：自己や他者の感情を知覚し、また自分の感情をコントロールする知能。</p>
<p>第4時限目</p>	<p>(1) 次の問いかけから、授業を展開する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>行動が、人々の心を揺り動かすのか。それとも、想いや感情が人々を行動へと駆り立てるのか。</p> </div> <p>(2) ジェームズ・ランゲ説※2 (グループ活動)</p> <p>自分の体を使って様々な姿勢を取り、どういう気持ちになるか体験する活動をグループで行う。</p> <p>例) 背を伸ばして落ち込んだ気持ちになるか。</p> <p>(3) (2) の活動を通じて、自分が考えたことをまとめ、(1) の Knowledge Issue について考え、理解する。</p> <p>(4) 「知識の妨げとなる感情」と「知識の源としての感情」について例を挙げながらディスカッションを行う。</p> <p>(5) 生徒に評価課題※3を配布する。</p>	<p><指導上の留意点></p> <p>感情と行動の関係について生徒に考えさせる。</p> <p>※2 ジェームズ・ランゲ説：情動の本質に関する説。「刺激→情動→身体変化」ではなく、「刺激→身体変化→情動」という道筋を考えたもの。「悲しいからなくのではなく、泣くから悲しい。」</p> <p><評価></p> <p>形成的評価</p> <p>【規準 A】学習者の視点を参照</p> <p>※3 「Obstacle or source?」(資料3-2 参照)</p> <p>知識の獲得という点において感情と理性の間にはどのような関係があるのかについて、イラストや自分の考えに対する反対意見も交じえながら5分間のプレゼンテーションを行う。</p>
<p>第5時限目</p>	<p>(1) 「知るための方法」としての理性と感情の関係についてグループでディスカッションを行う。</p> <p>例) 5～6人の様々な人物が登場するストーリーを提示し、それぞれの人物にどのような感情を持つかを考え、受け入れることのできる順番に並べ、なぜそのような感情を持ったかについて話し合う。</p>	<p><指導上の留意点></p> <p>理性と感情の関係を踏まえた上で「知るための方法」としての感情の役割について生徒の理解を求める。</p> <p><評価></p> <p>形成的評価</p> <p>【規準 A】学習者の視点を参照</p> <p>※生徒による相互評価も実施</p>

	<p>(2) 次の Knowledge Issue について、生徒の主導の下、ディスカッションを行う。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>感情を通して、私たちは何かを知り得るのだろうか。</p> </div>	
<p>第6時限目</p>	<p>(1) 『『知識の妨げ』か『知識の源』か』※4について生徒のプレゼンテーションを行う。</p>	<p><評価> 形成的評価 【規準 C】 Knowledge Issue の分析を参照 ※4 評価課題の内容は資料 3-2 及び第 3 時限目参照</p>
<p>第7時限目</p>	<p>(1) 理性と感情の関係を考えるため、フィニアス・ゲージの物語※5をクラスで紹介する。</p> <p>(2) 我々が行動する動機となる無意識の力について論じているビデオ(教材⑥)を鑑賞する。 (我々の行動を条件付けている無意識の判断や思考、感情を変えることで成功につながることができるといった内容)</p> <p>(3) Knowledge Issue の再考をする。:</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>感情や価値観から完全に独立した「知識」は存在するのだろうか。</p> </div> <p>(4) 獲得した知識を評価する際の感情や価値観の役割について良く考え、ディスカッションを行う。今後の学習において、自分自身の参考資料とするために話し合いの内容をノートに記録する。</p> <p>(5) この単元の最終段階で、生徒に再び「感情」とは何かを表す絵を描かせる。授業のはじめに自分が描いた感情を表す絵と違う点と似ている点を比べ、振り返りをする。</p>	<p><指導上の留意点></p> <p>理性と感情の関係を踏まえた上で「知るための方法」としての感情の役割について生徒の理解を求める。</p> <p>※5 フィニアス・ゲージの物語：鉄の棒が脳を貫通し、脳に大きな穴が空いても生き延びた奇跡的な症例で、事故により脳の一部が破壊されたため、温厚だった人が、怒りっぽく気分屋で短気な性格になり、人格が大きく変わってしまった話。</p> <p><評価> 形成的評価 【規準 A】 学習者の視点を参照</p>

7 評価規準(付けたい力)

(1) 総括的評価

各授業における教員の形成的評価（規準 A）と、第6時限目で行うプレゼンテーション（規準 C）により、単元の中で TOK の学習目標がどこまで達成できたかを総括的に評価する。

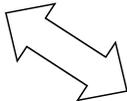
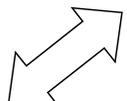
<規準 A> 学習者の視点

段階	観 点	指 標	評価(6点)
A1	Knowledge Issue に対する自分なりの気づきや認識、考えを導き出す力を示す。	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2
A2	一人一人が異なる視点を持つ学習者として、自分なりの気づきや視点、考え方を表す。	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2
A3	Knowledge Issue に学習者としての自らの経験や日常生活を重ね合わせる。	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2

<規準 C> Knowledge Issue の分析

段階	観 点	指 標	評価(6点)
C1	Knowledge Issue を一つの視点からだけでなく、別の視点から見る目を養う。関連するエリアにおいて Issue が含む言外の意味について考え、真意を汲み取る。	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2
C2	事実と適切な詳細情報を用いて、議論を正しく行う。	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2
C3	反論、反芻の探究と評価	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2

TOK指導案 「知るための方法」に関する事例

<p>1 単元名 「知るための方法」としての知覚</p>
<p>2 学年 高校2年</p>
<p>3 各概念の統合</p>
<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; width: 45%;"> <p style="text-align: center;">「TOK」のどのような部分を学習するのか</p> <p>世界の至るところに存在する「知識」を私たちが獲得していくために、知覚や認識がどのような役割を果たすのだろうか。</p> </div> <div style="text-align: center; width: 10%;">  </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; width: 45%;"> <p style="text-align: center;">生徒の理解が期待される概念</p> <p>「物質的世界の本質」について、その意味を論じたり、理解したりするための基礎としての言語や知覚の必要性</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center; margin-top: 20px;"> <div style="text-align: center; width: 20%;">  </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; width: 60%; text-align: center;"> <p style="text-align: center;">学習活動における重視すべき視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「百聞は一見にしかず」は本当だろうか。 ・私たちは世界を常に正しい目で見てきているだろうか。 ・知覚には、信念や文化、言語は必要だろうか。 </div> <div style="text-align: center; width: 20%;">  </div> </div>
<p>4 単元の目標</p>
<p>○知識に関連する知覚の意味や概念について学ぶとともに、知覚が、様々なコミュニケーションの方法とどのように区別できるかを考えることができるようにする。</p> <p>○知識を獲得していく上で、知覚が果たす重要な役割について考え、理解することができるようにする。</p>
<p>5 使用する教材等</p>
<ol style="list-style-type: none"> ① Ken Sievers, Martin Davies 「Nature of Knowing」, Michael Woolman 「Ways of Knowing」 (IBID Press) ② Eileen Dombrowski, Lena Rotenberg, Mimi Bick (2007) 「Theory of Knowledge Course Companion」 (Oxford University Press) ③ Sue Bastian (2008) 「Theory of Knowledge」 (Pearson Baccalaureate) ④ Richard van de Lagemaat (2005) 「Theory of Knowledge for the IB Diploma」 (Cambridge University Press) ⑤ Jonah Lehrer (2008) 「Grape expectations」 (The Boston Globe) ⑥ The Nature of Sense Perception (資料3-3参照) ⑦ ヘレンケラーのドキュメンタリークリップ

6 単元の指導過程

	学 習 活 動	指導上の留意点・評価
第1時限目	<p>(1) Knowledge Issue を書くところから、授業を展開する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 世界の至るところに存在する「知識」を私達が獲得していくために、知覚や認識がどのような役割を果たすのだろうか。 </div> <p>(2) 6～7人のグループに分かれ、コーディネーター役を選び、上記の Knowledge Issue について、生徒間でディスカッションを行う。</p>	<p><指導上の留意点></p> <p>教員は教材③42～44ページ「What is perception?」の内容を踏まえ、知覚の種類や知覚を通じて目の前のものを認識するしくみなど、知覚とは何かを説明する。</p> <p><評価></p> <p>形成的評価</p> <p>【規準 A】学習者の視点を参照</p>
第2時限目	<p>(1) 私たちを取り巻くこの世界を理解するために、私たちがどれ程知覚に頼っているのかについて、疑問の提起を促すビデオクリップなどを見て、知覚がどこまで正確なのかを考える。</p> <p>例) ・視覚を通して認識した映像によって目の錯覚が起きるのはなぜか</p> <p>・実験結果は全て感覚や知覚を通して認識されるが、実験を通して立証された科学的知見は、本当に正しいと言えるのか</p> <p>(2) 「知覚」について学校で学んだことを確認する。</p> <p>例) 生物で学習した感覚器官（目、耳など）の構造と脳への情報の伝達について</p>	<p><評価></p> <p>形成的評価</p> <p>【規準 A】学習者の視点を参照</p>
第3時限目	<p>(1) 見る、聞く、触る、味わう、香る、の5つの知覚について、グループで、役立つ順にランク付けを行う。</p> <p>(2) 次の授業への準備として、次の Knowledge Issue についてよく考え、自分なりのアイデアを導き出すための時間を設ける。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 視覚的に物を見る場合、人は目だけでそれを見ていると思いがちだが、実はそれと同時に、理解するという方法を通して脳で物事をとらえているのである。 </div> <p>(3) 評価課題※1を配布する。</p>	<p><評価></p> <p>形成的評価</p> <p>【規準 A】学習者の視点を参照</p> <p>※1 「The Nature of Sense Perception」(資料3-3参照)</p> <p>知識が物を見る役割を担う器官であるという言葉が何を意味するか。また、物を見るには明確な考えを持つことが必要かということについて、客観的なデータを用いつつ、反対意見も踏まえながら、自分の分析について5分間のプレゼンテーションを行う。</p>

<p>第4時限目</p>	<p>(1) 次の Knowledge Issue を理解する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>高価なワインは、他のワインに比べて味が良いと言えるだろうか。</p> </div> <p>教員は、以下のような記事の内容を説明する。 (参考) 記事 (教材⑤) の概要</p> <p>同じワインに5～90ドルの値段を付けたところ、飲んだ人々は、高いワインの方がおいしいと答えた。これは、「高いワインはおいしい」という人々の期待が脳に伝わりそう感じさせたものである。</p> <p>(2) 少人数のグループに分かれ、(1) の記事に関するディスカッションを行い、良い Knowledge Issue をグループで考える。</p> <p>(3) 各グループで考えた Knowledge Issue を比較し、それぞれの生徒の評価を持ち寄り、クラス全体で一番良いものを決定する。</p>	<p><評価> 形成的評価 【規準 A】学習者の視点を参照</p>
<p>第5時限目</p>	<p>(1) 知覚と言語 (若しくは、他の「知るための方法」) との関係と、知識の獲得におけるそれらの役割についてディスカッションを行う。</p> <p>(2) ヘレン・ケラーのドキュメンタリークリップを見る。</p> <p>(3) 視覚と聴覚を失ったヘレン・ケラーにサリバン先生はどのように話すことを教えたのか、また、これら以外の知覚を失った場合にはどのように教えるのかを考え、知覚からどのようにして言語を身に付けるのか、知覚と言語の関係をグループで話し合う。</p> <p>例) グループのうち1人が目隠しをして目の見えない役をし、他の生徒は、どうやって教えるか実演しながらグループで話し合う。</p>	<p><指導上の留意点> 知るための方法である知覚と言語の関係について生徒の理解を求める。</p> <p><評価> 形成的評価 【規準 A】学習者の視点を参照</p>
<p>第6時限目</p>	<p>(1) 「知覚の本質」※2について生徒のプレゼンテーションを行う。</p>	<p><評価> 形成的評価 【規準 C】 Knowledge issue の分析を参照 ※2 評価課題の内容は資料3-3及び第3時限目参照</p>
<p>第7時限目</p>	<p>(1) 知覚が、いかに選択的に情報を収集しているかについて、グループごとに考える。 例) 車を運転しているとき、人は通り過ぎる全ての情報を捉えているか。</p> <p>(2) Knowledge Issue の再考:</p>	<p><指導上の留意点> 知識を獲得する際に知覚が果たす役割や知覚の選択性について生徒の理解を求める。</p>

世界の至るところに存在する「知識」を私たちが獲得していくために、知覚や認識がどのような役割を果たすのだろうか。

(3)「物質的世界の本質に対する私たちの理解やその意味を論じる上で、知覚と言語は不可欠かつ基本となる」という概念について再度考え、ディスカッションを行う。今後の参考資料として残すために、考えやディスカッションの内容などをノートに記録する。

<評価>

形成的評価

【規準 A】学習者の視点を参照

7 評価規準(付けたい力)

(1)総括的評価

各授業における教員の形成的評価(規準 A)と、第6時限目で行うプレゼンテーション(規準 C)により、単元の中で TOK の学習目標がどこまで達成できたかを総括的に評価する。

<規準 A> 学習者の視点

段階	観 点	指 標	評価(6点)
A1	Knowledge Issue に対する自分なりの気付きや認識、考えを導き出す力を示す。	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2
A2	一人一人が異なる視点を持つ学習者として、自分なりの気付きや視点、考え方を表す。	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2
A3	Knowledge Issue に学習者としての自らの経験や日常生活を重ね合わせる。	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2

<規準 C> Knowledge Issue の分析

段階	観 点	指 標	評価(6点)
C1	Knowledge Issue を一つの視点からだけでなく、別の視点から見る目を養う。関連するエリアにおいて Issue が含む言外の意味について考え、真意を汲み取る。	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2
C2	事実と適切な詳細情報を用いて、議論を正しく行う。	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2
C3	反論、反芻の探究と評価	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2

TOK指導案 「知識の領域」に関する事例

<p>1 単元名 「知識の領域」としての芸術</p>
<p>2 学年 高校2年</p>
<p>3 各概念の統合</p> <div style="text-align: center;"> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;"> <p>「TOK」のどのような部分を学習するのか</p> <p>芸術は、一種の知識なのだろうか。それとも、知識を表現するための方法なのだろうか。</p> </div> <div style="font-size: 2em;">↔</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;"> <p>生徒の理解が期待される概念</p> <p>芸術には様々な形態が存在するが、美しさと魅力に満ちた作品を創り上げることへの想いは、世界に共通するものである。</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center; margin-top: 20px;"> <div style="font-size: 2em;">↙</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;"> <p>学習活動における重視すべき視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・芸術には、何らかの深い意味が込められるべきだろうか。 ・芸術において、形態はどのように重要なのだろうか。 ・あらゆる芸術には、何らかの共通する特性があるのだろうか。 ・芸術の最終的な目的とは説明することか。 </div> <div style="font-size: 2em;">↘</div> </div> </div>
<p>4 単元の目標</p> <p>○芸術と芸術でないものを区別するための判断基準や、作者の視点から見た芸術と芸術を鑑賞する人々の目でとらえる芸術との比較、真の美しさの判断について考察できるようにする。</p> <p>○芸術の目的や他の「知識の領域」に芸術が及ぼす影響など、「知識の領域」としての芸術の本質について考察を重ねることができるようにする。</p>
<p>5 使用する教材等</p> <ol style="list-style-type: none"> ① Ken Sievers, Martin Davies 「Nature of Knowing」, Michael Woolman 「Ways of Knowing」 (IBID Press) ② Eileen Dombrowski, Lena Rotenberg, Mimi Bick (2007) 「Theory of Knowledge Course Companion」 (Oxford University Press) ③ Sue Bastian (2008) 「Theory of Knowledge」 (Pearson Baccalaureate) ④ Richard van de Lagemaat (2005) 「Theory of Knowledge for the IB Diploma」 (Cambridge University Press) ⑤ Art and the Way of Life in Japan (資料3-4参照) ⑥ TED Talks 「美の進化論的起源」 (映像資料)

6 単元の指導過程

	学 習 活 動	指導上の留意点・評価
第1時限目	<p>(1) 次の Knowledge Issue の導入から学習を展開する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 芸術は、一種の知識なのだろうか。それとも、知識を表現するための方法なのだろうか。 </div> <p>(2) (1) の Knowledge Issue について、生徒主導の下、ディスカッションを行う。ディスカッションを主導するコーディネーター役を選ぶ。</p> <p>(3) 様々な芸術の種類をクラス全体で出し合う。 (例：音楽、美術、ダンス、文学、演劇など)</p> <p>(4) これらの異なる芸術の種類に共通する要素は何かということについて、グループごとに意見を出し合う。</p>	<p><指導上の留意点> 学習の目標やねらいについて検討するため、DP の芸術の評価規準を配布し、生徒に何が求められているかを確認させる。</p> <p><評価> 形成的評価 【規準 A】学習者の視点を参照</p>
第2時限目	<p>(1) 次のような活動を行い、芸術と他の「知識の領域」との比較をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループスキット: 鳥の群れの観察 科学者、数学者、歴史家などの専門家が同じ鳥の群れを見た場合、それぞれどんな視点で何を見るのだろうか。 ・文学的芸術に関するディスカッション 文学は芸術と言えるのではないか。言語を使って自分の見ている世界を言葉で表しているのだと考えられないか。 ・「意識の流れ」に関するライティング活動 文法も何も考えずに、音楽を聴いたり、においを嗅いだりして感じたことを書いてみる。 	<p><指導上の留意点> ある物事を芸術作品として捉える場合の判断基準（教材③257、258ページ「What counts as art?」参照）を踏まえた上で指導する。</p> <p><評価> 形成的評価 【規準 A】学習者の視点を参照</p>
第3時限目	<p>(1) 「知識の領域」としての芸術について探究する。 前時に「意識の流れ」について書いたものを音読し、お互いの作品を評価し合う。</p> <p>(2) 何が「物」を芸術に変えるか、あるものが芸術であると判断するとき、何らかの基準があるのか、あるとすればどのようなものかということについてクラスでディスカッションする。 例) 4つの詩（普通の学生や様々な時代の詩人が作ったもの）※1を読み、どれが好きかを選ぶ。その判断を基に、以下のような点についてクラスでディスカッションする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どんなものでも芸術になり得るのだろうか。 ・芸術として受け入れられるものには、何らかの限界や制限があるのだろうか。 ・誰がそれを決めるのだろうか。 	<p><指導上の留意点> 何が「物」を芸術に変えるのかということについて生徒の理解を求める。</p> <p><評価> 形成的評価 【規準 A】学習者の視点を参照</p> <p>※1教材③257ページ参照</p>

	<p>・日本文化において、芸術の意義とは何だろうか。</p> <p>(3) いろいろな形の色紙の組み合わせ一式(全員同じもの)を生徒全員に配布する。テーマを設定し、絵を作成するよう指示する。出来上がった作品から一番良い絵を選ぶ。</p> <p>(4) 評価課題※2を配布する。</p>	<p>※2「Art and the Way of Life in Japan」(資料3-4参照)</p> <p>コミュニティーにおいて芸術がどのような役割を果たすかということについて、日本における芸術の役割や生活様式との関係などを考え、5分間のプレゼンテーションにまとめる。その際、芸術と生活様式との関係に関する異なる考え方や日本独特の芸術の形態にも触れつつ分析をする。</p>
<p>第4時限目</p>	<p>(1) 芸術作品を判断する際、純粹に主観的な考えや見方に基づいて行うものなのか、それとも客観的な視点を通して行うものかについてクラスでディスカッションする。</p> <p>(2) 「知識の領域」としての芸術と数学の関係を探る。</p> <p>例) 黄金率というものがあるが、果たして本当なのかということ話し合い、芸術には客観的な基準があるのかについて考える※3。</p>	<p><評価> 形成的評価 【規準 A】学習者の視点を参照</p> <p>※3教材③265、266ページ「Are there objective standards of beauty?」参照</p>
<p>第5時限目</p>	<p>(1) 作者の視点から見た芸術についてクラスディスカッションをする。</p> <p>(2) 鑑賞する人々の視点から見た芸術についてクラスディスカッションをする。</p> <p>例) 岡本太郎の「明日の神話」のように未完成でも評価されている絵もあるが、鑑賞する人々は何を見て何を評価するのか。</p> <p>(3) 振り返りの活動</p> <p>作者としての観点と鑑賞者としての観点を考えさせる。(作者は何を考えて物を作るのか。鑑賞者にとって何が重要か。)</p>	<p><指導上の留意点></p> <p>芸術作品を見るときに、作者としての観点と鑑賞者としての観点があることについて生徒の理解を求める。</p> <p><評価> 形成的評価 【規準 A】学習者の視点を参照</p>
<p>第6時限目</p>	<p>(1) 「日本の生活様式と芸術」※4について生徒のプレゼンテーションを行う。</p>	<p><評価> 形成的評価 【規準 C】 Knowledge Issue の分析を参照</p> <p>※4 評価課題の内容は資料3-4及び第3時限目参照</p>
<p>第7時限目</p>	<p>(1) 美の起源に関するビデオ(教材⑥)を鑑賞後、クラスでディスカッションを行う。</p> <p>例) 生徒は、ビデオの中で、説明に使われた証拠のリストを作成する。各証拠について、他の証拠より有効であるか、その証拠が意味することは何か、与えられた Knowledge Claim を裏付けるのに使えるのは一つの証拠だけか、などの観点から吟味する。ディスカッションの後、ノートに考えをまとめ</p>	<p><評価> 形成的評価 【規準 A】学習者の視点を参照</p>

る。
 (参考) ビデオの概要
 芸術は目で見るものであり、文化的な条件によって美が定義されていると考えがちであるが、美は言語が現れるずっと前から、我々の古い祖先が受け継いできたものであり、我々の心の中に存在しているものであるということを経験的な証拠を用いて説明する。

(2) Knowledge Issue の再考:

芸術は、一種の知識なのだろうか。それとも、知識を表現するための方法なのだろうか。

(3) 文化ごとに様々な芸術の形態が存在するが、美に対する思いは全世界に共通するものであるという概念を振り返り、クラスでディスカッションを行う。自分自身の参考資料とするためにその内容をノートに記録する。

7 評価規準(付けたい力)

(1) 総括的評価

各授業における教員の形成的評価(規準 A)と、第6時限目で行うプレゼンテーション(規準 C)により、単元の中で TOK の学習目標がどこまで達成できたかを総括的に評価する。

<規準 A> 学習者の視点

段階	観 点	指 標	評価(6 点)
A1	Knowledge Issue に対する自分なりの気づきや認識、考えを導き出す力を示す。	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2
A2	一人一人が異なる視点を持つ学習者として、自分なりの気づきや視点、考え方を表す。	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2
A3	Knowledge Issue に学習者としての自らの経験や日常生活を重ね合わせる。	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2

<規準 C> Knowledge Issue の分析

段階	観 点	指 標	評価(6 点)
C1	Knowledge Issue を一つの視点からだけでなく、別の視点から見る目を養う。関連する領域において Issue が含む言外の意味について考え、真意を汲み取る。	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2
C2	事実と適切な詳細情報を用いて、議論を正しく行う。	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2
C3	反論、反芻の探究と評価	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2

TOK指導案 「知識の領域」に関する事例

<p>1 単元名 「知識の領域」としての歴史</p>
<p>2 学年 高校2年</p>
<p>3 各概念の統合</p>
<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;"> <p style="text-align: center;">「TOK」のどのような部分を学習するのか</p> <p>過去の出来事について、私たちはどの程度確信を持って話す事ができるのだろうか。</p> </div> <div style="text-align: center; font-size: 2em;">↔</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;"> <p style="text-align: center;">生徒の理解が期待される概念</p> <p>歴史を完全に客観的な目でとらえる事は不可能だが、様々な視点から過去を探究することで、事実に近づいていくことは可能である。</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: center; align-items: center; margin-top: 20px;"> <div style="text-align: center; font-size: 2em;">↙</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; width: 60%; margin: 0 auto;"> <p style="text-align: center;">学習活動における重視すべき視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歴史とは何か。 ・歴史とは、過去を学ぶことだろうか。若しくは過去の記録について学ぶことだろうか。 ・歴史的説明とは何か。 ・歴史とフィクションとはどう似ているか。 ・歴史的な出来事を、中立的な立場で表すことは可能だろうか。 </div> <div style="text-align: center; font-size: 2em;">↘</div> </div>
<p>4 単元の目標</p>
<p>○学習者がどのように過去の出来事を解き明かしていくか、歴史の中で論じられてきたことが真実であるか否かをどのように決定するのかを、一次資料※や二次資料※の持つ意味、避けては通れないそれらの資料の信頼性の問題など、歴史的事実と歴史的な視点から分析し考察を重ねていくことができるようにする。</p> <p style="margin-top: 20px;">※一次資料：実際にその出来事が起こった当時にそれを目撃した人々による記録 二次資料：一次資料を基に、一定期間を経てから書かれた記録</p>
<p>5 使用する教材等</p>
<ol style="list-style-type: none"> ① Ken Sievers, Martin Davies 「Nature of Knowing」, Michael Woolman 「Ways of Knowing」 (IBID Press) ② Eileen Dombrowski, Lena Rotenberg, Mimi Bick (2007) 「Theory of Knowledge Course Companion」 (Oxford University Press) ③ Sue Bastian (2008) 「Theory of Knowledge」 (Pearson Baccalaureate) ④ Richard van de Lagemaat (2005) 「Theory of Knowledge for the IB Diploma」 (Cambridge University Press) ⑤ The Map is not the Territory (資料3-5参照)

6 単元の指導過程

	学 習 活 動	指導上の留意点・評価
第1時限目	<p>(1) 次の Knowledge Issue の導入から授業を展開する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>過去の出来事について、私たちはどの程度確信をもって話すことができるのだろうか。</p> </div> <p>上記の Knowledge Issue について、コーディネーター役を選び、生徒主導でディスカッションを行う。</p>	<p><評価> 形成的評価 【規準 A】学習者の視点を参照</p>
第2時限目	<p>(1) 「知識の領域」としての歴史について、以下のような視点から、クラスでディスカッションを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歴史とは何か。 ・歴史学者はどのようなことをしているのか。 <p>(2) 探究課題：クラスにおける記憶の喪失 授業中居眠りをしている、起きたら記憶がなくなっていた。情報を収集するために、あなただったら何をするかを考える。</p> <p>(3) 歴史が自分たちにどのようにアイデンティティを与えてくれるのかについてクラスでディスカッションを行う※1。</p> <p>(4) 歴史的出来事が書かれた一覧表を生徒に配布し、生徒はペアになって、それらを重要と思われる順番に格付けする。それを他のペアと比較し、どんな基準で格付けを行ったかについて意見を述べ合う。</p>	<p><指導上の留意点> 情報収集の過程と歴史家の研究過程を重ねて考えるように導き、その過程が類似していることに気付かせる。</p> <p><評価> 形成的評価 【規準 A】学習者の視点を参照</p> <p>※1 教材③211、212 ページ「The contested past」参照</p>
第3時限目	<p>(1) 「知識の領域」としての歴史の中での知識獲得において、4つの「知るための方法」が果たした役割を比較し、クラスでディスカッションを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「歴史における事実の役割」と「知覚」 ・「歴史的解釈の本質」と「感情」 ・「歴史的表現の手段」と「根拠」 ・「歴史の中の表現」と「言語」 <p>(2) 評価課題※2を配布する。</p>	<p><指導上の留意点> 教員は、歴史と4つの「知るための方法」の関係（教材③216～219 ページ「History and the Ways of Knowing」参照）を踏まえて生徒の理解を促す。</p> <p><評価> 形成的評価 【規準 A】学習者の視点を参照</p> <p>※2 「The Map is not the Territory」（資料3－5参照）</p> <p>「地図は領土ではない」という言葉は、歴史的事実の本質をどの程度捉えた言葉であるかを考え、地図上の国境の意味や地図上の色によるインパクトも踏まえつつ、地理的な国の大きさや形ではなく、歴史的概念を表す世界地図を作成する。</p>
第4時限目	<p>(1) 一次資料と二次資料を使って、それぞれの信頼性、各国の一次資料における見解の違い、</p>	<p><指導上の留意点> 歴史は選択的に語られるとともに、</p>

	<p>どういものが一次資料や二次資料になり得るかなどをクラスでディスカッションする。</p> <p>(2) 探究課題：タイムカプセル 500年後の人々に、2012年を理解してもらうには、タイムカプセルに何を入れるかについて話し合う。</p> <p>(3) プロパガンダに対する防御としての歴史についてクラスでディスカッションする。</p>	<p>プロパガンダのツールとして利用されることがあるので、様々な観点から見て、伝えていくことが重要となることを生徒に理解させる。</p> <p><評価> 形成的評価 【規準 A】学習者の視点を参照</p>
<p>第5時限目</p>	<p>(1) 次のような点について考えるため、歴史的資料や学校が制作したビデオ（運動会や合唱祭などを記録したビデオ）の検証を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人々はなぜ、歴史的な出来事を書面に残すということに必要性を感じるのか。 ・書面で残される歴史的な出来事は、どのように選択されたのだろうか。 ・一次資料は、どの程度事実に近いものか。 <p>例) 学校が大切にしている運動会のビデオについて、どういう目的で、どんなイメージを作ろうとして作成されたのかを考える。</p> <p>(2) 探究課題：歴史の目撃者※3 次のような質問について生徒は各自考えをまとめ、お互いの考えを比べ、一致したかどうか、またなぜそうなったのかについてクラスでディスカッションする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・TOK の授業の中で最も印象に残っていることは何か。 ・今年、学校であった5大イベントは何か。 ・1999年に学校で起こったことに関する情報を収集するにはどのような方法が1番いいか。 ・学校の歴史を書くとしたら誰が1番適任か。 <p>(3) 歴史的な正確性を決定する上での知覚・言語・感情・根拠の役割を考え、クラスでディスカッションをする。</p>	<p><評価> 形成的評価 【規準 A】学習者の視点を参照</p> <p>※3資料3－6参照</p>
<p>第6時限目</p>	<p>(1) 今までの学習をまとめた後、「The Map is not the Territory」※4の課題について生徒のプレゼンテーションを行う。</p>	<p><評価> 形成的評価 【規準 B】 Knowledge Issue の理解を参照 ※4評価課題の内容は資料3－5及び第3時限目参照</p>
<p>第7時限目</p>	<p>(1) 歴史以外の他の「知識の領域」との関わりの中での歴史の役割や、他の「知識の領域」において、歴史的な知識はどのように扱われているかということについて深く考える機会を与えるため、グループ活動を行う。</p> <p>(2) Knowledge Issue の再考をする。 過去の出来事について、私たちはどの程度</p>	<p><評価> 形成的評価 【規準 A】学習者の視点を参照</p>

確信をもって話すことができるのだろうか。
 (3) 歴史を様々な視点から探究することで事実に近づくことが可能であるという概念について振り返り、ディスカッションを行う。自分自身の参考資料とするためにその内容をノートに記録する。

7 評価規準(付けたい力)

(1) 総括的評価

各授業における教員の形成的評価(規準 A)と、第6時限目で行うプレゼンテーション(規準 B)により、単元の中で TOK の学習目標がどこまで達成できたかを総括的に評価する。

<規準 A> 学習者の視点

段階	観 点	指 標	評価(6点)
A1	Knowledge Issue に対する自分なりの気付きや認識、考えを導き出す力を示す。	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2
A2	一人ひとりが異なる視点を持つ学習者として、自分なりの気付きや視点、考え方を表す。	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2
A3	Knowledge Issue に学習者としての自らの経験や日常生活を重ね合わせる。	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2

<規準 B> Knowledge Issue の理解

段階	観 点	指 標	評価(6点)
B1	Knowledge Issue に関する質問や説明、別の視点からの考え方、可能性のある答えなどを自らの力で考え、導き出す。	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2
B2	Knowledge Issue への様々なアプローチ法を、互いにリンクさせつつ、それぞれの方法を効果的に比較する。	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2
B3	適切な根拠や議論、例などをふさわしい形で用いる。	SELDOM	0
		GENERALLY	1
		CONSISTENTLY	2